

## 中国音楽を知る新しい情報源として興味深い DVD『中国音楽の世界』

増山賢治（愛知県立芸術大学音楽学部教授）

日本で主要情報源として入手可能な中国音楽に関する視聴覚資料のうち、録音資料では中国（香港・台湾を含む）、日本、欧米など制作地域によって量的、質的な差異は厳然として存在するものの、CD が第一義的地位を占めていることは大方の一致するところである。それに対して映像資料については、ごく一部の音楽専門家や愛好家が中国直輸入の中国音楽の DVD や VCD を入手することはあっても、概して CD ほど普及していないというのが現状であろう。もし音楽研究者や音楽教育関係者であれば中国音楽の映像を必要とした際に『音と映像による世界民族音楽大系』（日本ビクター、1987）、『音と映像による新世界民族音楽大系』（日本ビクター、1994）などを思い浮かべるかも知れないが、それらは一般向けというより学術的な色合いが強く、個人的な入手しやすさという点では CD に及ばないことは明らかである。

そうした状況の中、近年、中国音楽に関する注目すべき DVD が日本のコニービデオから出た。同社（HP は <http://www.chinasoft.co.jp/>）は中国文化・歴史遺産・自然紀行など中国に関する興味深い内容の映像ソフトを提供しており、その中には今回取り上げる『中国音楽の世界』のほかに、『中国楽器』『陝西の太鼓踊り』『仏教古代詠唱歌』など中国音楽芸能関係のものが含まれている。それらは中国で制作した DVD を輸入販売したものではあるが、筆者の知る限り、日本で一般向けに発売されたおそらく中国音楽に関する最初の（特に内容的にしっかりとしているという意味で）DVD だと思われるので、その中の一点『中国音楽の世界』を取り上げてその見所と問題点を検討したい。まず、同 DVD の基本データを書き出してみる。

製作：中国中外文化交流中心

発売元：コニービジョン／販売元：コニービデオ

中国音楽の世界（原題：中国音楽概観 英文タイトル：A Colour TV Documentary Chinese Music at a Glance） 2004.11.21 DNN-718 25 分 価格 ￥2,625（税込）



ナレーションの音声言語は 10ヶ国語 - 中国語（北京語）、英語、フランス語、スペイン語、アラビア語、日本語、ロシア語、ドイツ語、イタリア語、ポルトガル語 - 対応となっているが、それぞれに切り替えて聞くことができるが、字幕翻訳のテロップはついていない。6チャプター構成であるが、それぞれにタイトルはないので、その内容に基づいて、筆者が仮題を付してみると次のようになるだろう。

チャプター 1 オープニングタイトル ~ 春秋戦国時代

チャプター 2 編鐘の演奏による《陽関三疊》~ 中華民国

チャプター 3 中華人民共和国成立以後

チャプター 4 伝統性の保持 地方の農民市民に行われる音楽

チャプター 5 西洋音楽の普及と伝統音楽の教育

チャプター 6 エンディングタイトル

チャプター 1-3 は中国音楽の歴史的回顧ともいうべきもので、「中国音楽、伝統と変遷」のタイトルコールがその主旨を簡潔明快に表現している。まず、河南省出土（新石器時代）の鳥の骨で作った縦笛が映し出され、中国音楽 8000 年の悠久な歴史を強調する常套手段で始まり、楽器や音楽に関する考古学資料の画像や壎（オカリナ）、排簫（パンパイプ）などの古代雅楽楽器のデモンストレーション映像が続く。そして、紀元前 10 世紀前後西周時代に生み出された製作素材に基づく世界最初の楽器分類法とされる「八音」の楽器およびその一部の演奏画像が紹介されるが、ナレーションはそれらの名称（建鼓、敔、柷、編磬、排簫、瑟など）については言及していない。次に、古代楽器の中でも最大級の逸品として 2400 年前の春秋戦国時代の編鐘（1978 年湖北省出土）が登場する。その音律や音響の特徴の説明があり、編鐘による琴曲《陽関三疊》の演奏の様子が映されるが、よく見ると音楽と画像がシンクロしていないことがわかる。それから演奏楽曲については、壎はシューベルトの歌曲《セレナード》、排簫は《コンドルは飛んでいく》をそれぞれ演奏しており、これらの楽器は一度滅びたかそれに近い状態にあったもの故、やむを得ない選曲ともいえようが、穿った見方をすれば、それは「中国楽器はどんな音楽でも演奏可能」というアピールの一面があるといえなくもない。

それらと違って古代楽器のうち、一応楽曲も伝承されている代表的ジャンルの七弦琴は儒教、道教の美学思想の音楽による表現、すなわち、文人の精神修養の一環として手堅く紹介されている。名手李祥庭による名曲《流水》の演奏が記録されているのも有り難い。古琴に続いて音による情緒表現、すなわち中国器楽の標題性を如実に示す典型的な例として琵琶の名曲《十面埋伏》が演奏されている。民族音楽学の分野では琵琶は西アジア起源であると考えられているが、ここでは「中央アジアから中国に流入したもの」と中国起源ではないという言及に止まって



いる。それに続いて、民間楽器の代表として、胡琴のうち日本でもよく知られている(中国音楽ファンの間ではあるが)二胡の名曲、阿炳作曲の《二泉映月》、劉天華作曲の《光明行》と近代における器楽の新たな発展が示される。《二泉映月》のタイトルイメージとなった名所「天下第二泉」の画像や伝統的な形状(六角形の胴)の二胡が演奏されているのは嬉しいが、それらの画像とナレーションでは、古琴、琵琶、二胡は時代的には大分隔たりがあることを認識しにくい点が惜しまれる。この辺りまでの内容は従来日本でも紹介されてきたものがほとんどで特に目新しい点は見られず、元宋、明清以降発達した劇音楽、器楽合奏などについては別の巻に収録されている(『中国戯曲(演劇への招待 京劇・川劇)』、『陝西の太鼓踊り』など)。

歴史編の締めくくりでは、近代における西洋音楽からの衝撃を受けた民族精神の発揚という視点から中国近代音楽史が語られる。聶耳の歌曲《義勇軍行進曲》(現在、中国国歌となっている)と冼星海のカンタータ《黄河大合唱》(後者は恐らく1965年制作の映画《音楽舞踊史詩・東方紅》よりの引用映像だろう)という近代中国の2人の偶像的作曲家が紹介される。そして、現代中国の音楽文化については従来通り、東西音楽の融合として、民族楽団の設立や民族的様式の楽曲を西洋楽器で演奏していることが強調されるが、加えて音楽文化の推進力としてメディアの影響に言及しているのは新しい解釈として注目される。

チャプター4は伝統音楽の概観で、ここからは伝統性の保持、すなわち現代中国社会で伝統音楽が実際どのように伝承され、人々の生活の中に息づいているかを紹介している。まさに駆け足ではあるが、そこからは伝統性の保持だけでなく、変容の現状も伺い知ることができる。陝西省の太鼓踊り、西南部のトン族の歌舞、独特の文字をもつ納西族の古典音楽(納西古楽)、チベットの代表的女性歌手才旦卓馬、遊牧民のウィグル族の歌舞の画像が次々に映し出される。ナレーションによれば、それらの音楽は「人々の生活と労働を表現している」とのことで、対外的なアピールには最適ともいえる光景が展開されている。同様の意味で勇壮な映像に仕上がっている陝西省の太鼓踊りは昨年、日本でも公演が行われたし、納西古楽は数年前日本のテレビが取り上げていたが、今本DVDを見て思うとそれらのイベントや番組は中国の対外政策に見事に乗せられたという印象を受ける。とはいえ、トン族の合唱ではその独特の多声性、発声法の一端を味わえるのは良いし、チベットの才旦卓馬はナレーションでは人名の中国音を基に「サイタンズオマ」(より正確にはツェテンドルマ)と読んでいるのは気にかかるが、名歌手の元気な歌声が聞けるのは喜ばしい。ちなみに、前掲の映画『東方紅』での若き日の彼女の歌声と聞き比べてみると感慨深いものがある。

それに続く宮廷音楽の伝統の継承とその民間音楽への反映の例として、仏教音楽(器楽)やチベット声明が紹介され、後者における指揮者の登場を現代風というののだろうが、伝統的な演奏様式を知るものにとっては衝撃的である。筆者は常々、中国文化全般について日本人は三国

志、唐詩などいくつかの特定のジャンルを以て、恣意的な夢の世界に陶醉する傾向を是正し、古い歴史がそのままの形ではないことに早く気づき、「現代の中国音楽に徒にいいしえの幻想を求めるべきでない」と考えている。換言すれば、現代の中国でもそれなりに伝統音楽が傳承されているにもかかわらず、極端に古いものにとられる、あるいは反対に新しい現象のみに目を奪われてしまうというように、日本人は中国音楽を時代的、地域的ともに局部的にしか見ようとせず、現存する伝統音楽をより広汎に深く理解することにあまりにも無頓着であると感じている。その意味で、以下の映像は短時間とはいえ、伝統音楽の裾野の広さ、本来の演奏の場やあり方を垣間見ることができる点で意義深い。

器楽合奏形式をも併有する語り物音楽の福建南音の画像では、当該の音楽ではなく別種のもものが流されているのは残念だが、琵琶、洞簫、二弦など同音楽特有の楽器が舞台上ではなく、普段の生活の中で撮影されている（少なくともそのように見える）のは喜ばしい。『世界民族音楽大系』に収録されている同音楽の日本公演のステージ録画と見比べてみると、本来の演奏の場を知ることの必要性について思い知らされ、本来の文化的脈絡から切り離し再構成して提供されるステージ公演の意義を再考せざるを得ない。

江南糸竹（江南地方に行われる弦楽器と竹製の笛を主体とする合奏）も杭州公園という同じように普段の演奏の場で、伝統音楽が人々の生活にいかに密着しているかがわかるような手法で撮影されているが、ここでも全く別種の音楽がBGMに使われているのは残念である。同音楽は『新世界民族音楽大系』に名手の演奏が収録されているので、それも合わせて鑑賞することもお勧めしたい。

琵琶と三弦伴奏による弾き語り、蘇州評彈は蘇州市の書館（＝演芸場）での収録らしく、蘇州語独特の響きとともに語り物本来の演奏の場の雰囲気にしばし浸ることができる。こうした語り物の類は日本でほとんど紹介されたことはないので、貴重な映像といえるだろう。

チャプター5は現代の中国音楽文化が直面する新しい情況の紹介で、ナレーションによれば「民謡歌手が芸術学院で教育を受けている」（つまり養成されているという意味らしい）現状や流行音楽からオーケストラまで現代の中国音楽シーンを広範囲に映し出し、「芸術面での百花斉放、学術面での百花争鳴の局面を呈している」「それぞれの音楽はその風采を競い合っている」と述べている（ここの「風采」という語については後述する）。それから、「東西兼用」と称しその成果として、中国の創作歌劇《原野》や、西洋のオペラ《カルメン》に新たな旋律が盛り込まれた（具体的には不明）ことを紹介し、有名ホールの映像を見せて、中国音楽は絶えず変化していると言明している。

続いて工業文明の発達による伝統音楽の危機に対する措置として芸術学院での教育（音楽家養成）が行われていることに触れ、古箏、笙のレッスン風景が映し出される。それだけ見ると、



日本と比べて手厚い保護策が施行されてことに敬服あるいは羨望の眼差しが向けられるかも知れない。しかし、上記の民謡歌手が芸術学院で養成されることと同じく、実はここにも深刻な問題が内在していることを知るべきである。そうでないと、演奏の画一化、西洋化が促進されて、伝統的な味わいがますます失われているという中国音楽の現状をひたすら称讃し続けるという愚挙に陥ることになるからである。情報をいかに読み解き、有効に活用するかというメディアリテラシーの基本を中国音楽の情報源に対しても適用するのはもはや当然のことであろう。

また、中国が世界の様々な音楽を学ぶ必要性を説く箇所で、西洋音楽（声楽）とともに日本の箏・三味線の演奏画像（恐らく訪中公演）が挿入されている。それは東アジアの代表例としてか、中国の一バリエーションとしてかその真意は計りかねるが、とりあえず中国文化の懐の深さを示しておきたいというところだろうか。エンディングは民族楽団（中国楽器で構成されるオーケストラ）のウィーン公演の様子と思われ、演奏曲目は李煥之の《春節序曲》である。最後にナレーションは「中国音楽は 8000 年の歴史の薫陶と百年の現代文明の洗礼を受けて新しい時代に突入した」と結んでいる。

以上の概要をふまえた上で、筆者が感じた見所と問題点や留意点を整理すると次のようになる。

- (1) タイトル通りまさに駆け足の鑑賞だが、多くのジャンルが出来る限り網羅され、どれも画像の効果がフルに発揮されており、視聴者は一応、中国音楽の歴史および代表的ジャンルの現状の一端に触れることができる。
- (2) 製作者が製作者だけに、まさに国威発揚、対外広報のプロモーション映像に仕上がっているが、それだけに演奏者は日本で活動する二流、三流、自称一流などとはさすがに違って、それなりのものが収められている（映像最後のテロップにより中国芸術研究院が何等かの協力をしたと推測される）。
- (3) 一応6つのチャプターに分かれているのだが、それぞれにチャプタータイトルがないのはやはり不便と言わざるを得ない。
- (4) 正確な理解に支障を来しかねないという意味で、ナレーションに関する翻訳の問題も若干指摘しておかねばならない。翻訳者は恐らく中国音楽に関しては素人なのだろうから、仕方ないこととはいえ、「誤：風格→正：スタイル」、「誤：体裁→正：ジャンル」、「誤：風采→正：立ち居振る舞い」と看過し難い誤りがいくつか散見する。また、専門的な事柄ではあるが、編鐘の音階説明で「C 調」といわわれても一般の視聴者は何のことかおそらく分からないだろう。
- (5) 中国からの輸入盤にありがちだが、カバー裏の作品解説のみで、クラシックや邦楽の DVD では当然となっている解説書がないのが惜しまれる。視聴者の理解の度合いが左右されるという意味で、それは重要なはずである。

尚、蛇足かも知れないが、本評論で言及した楽器名、楽曲名、人名などの文字情報のほとん

どは筆者が本 DVD を視聴して直接引き出したものであることを一応付記しておきたい。これらの文字情報がないと、一般の視聴者は内容が十分理解ができないと思うが、どうであろうか。いまさら本 DVD の解説書の必要性を云々しても始まらないが、現在日本で発行されている多くの中国音楽の CD やビデオに多く見られる情況、すなわち、中国音楽を専門としない者による解説や中国の音楽研究者の解説文を唯一の権威のようにして日本語訳したものではなく、これからは民族音楽学をベースにしたより広範囲な視点から日本人にとって重要な情報を取捨選択した形での解説があってもよいと思う。ただ、本 DVD に限っていえば、中国語の解説書を翻訳しただけの不適切な代物が付されるよりは「無いほうがましである」と考えたい。

中国音楽を専門研究分野としている者の立場から、いろいろ注文を言い出したらキリがないが、全体的にいて、本 DVD は広く一般はもとより中高および大学の音楽教育の場でも活用できる内容を含んでいると思う。二胡や女子十二楽坊などに代表される商業ベースの新しい中国音楽に陶醉している悪しき状況を少しでも改善するためには、興味深いシリーズ企画なので、同社によるその他の中国音楽に関する DVD(舞踊も含めて)について追って批評を試みていきたい。